

## 「学ぶということと伝えるということ」

櫛田 昭裕

親友が白血病で亡くなりました。家族と触れ合い、死ぬ瞬間まで真剣に学び続け、真剣に生きました。僅かな限りある命を生きることによって決して絶望しませんでした。

真城義麿大谷高校前校長は、「人間に生まれた限り、いかなる時代状況であれ、どんな社会情勢であれ、その中で生きていかなければならない者として、学ばなければならぬことがある。自分として、明確にしなければならぬことがある。」と言われます。

私も、もうそろそろ、いやなこと、わからないことから逃げ回るのをやめて、自分と向き合わなければと思うようになりました。学生時代に学べたのに学ばなかったことを、もう一度学びたい。そして、学ぶということを通して「出会うべきものに出会い得たい」と心より願うようになりました。

しかし、学べば学ぶほど、わからなくなります。学んだことを、誰かに尋ねてみたくになります。そして、気付いたことを誰かに伝えたくになります。ところが、相手に理解してもらえよう伝えることは、とても難しいことです。真意とは逆にさえとられてしまうことがあります。

ある友人が、こんなことを教えてくれました。「ことばから伝わることはほんの僅かなもの。ほとんどもが、眼差し、しわ、表情、物腰など、その人の生きてきた歴史の証である。その人そのものから伝わるんだよ。平生が大事なんだよ。」

三欠長者をご存知ですか。三欠の欠くとは、欠席の欠の字で、欠けることです。義理、人情、恥の三つに欠けることを三欠といいます。義理、人情、恥の三つを欠いた生き方で大金持ちになった長者がいました。そんな長者が、大病を患い、死を悟りました。死んでもあの世へ何も持って行けないことに初めて気付きました。そして、自らの生き方の過ちを何とか一人でも多くの人に伝えたいと心より願いました。そこで、息子に、「自分が死んだら棺の両脇に小さな穴を開け、そこから手を出してくれ。その格好で必ず葬儀を出し墓場まで運んでくれ。」と真剣にきつく頼みました。そこで、三欠で育った息子は、長者が亡くなった後、嫌々でしたが、親の遺言だからとその通りにしました。ところが、葬儀に来た参列者は、口々に「さすがに三欠長者だ、死んでからも物欲しそうに何かをつかんでやろうと、棺から両の手を出しているわ。どこまで、欲の皮が厚いんだろう。」とあざ笑ったそうです。長者の死をもって伝えようとした真理が全く逆にとられてしまいました。

いかに、平生が大事か、教えられます。空しくない人生を送るために、出会うべきものに出会い得るために、日々大切にしていきたいものです。手遅れにならないためにも。